

# 行政との協働、NGO活動最前線からの報告 ～ 2020年東京オリンピック・パラリンピック大会を 見据えた「ボーイスカウト」の経験～

埼玉県総務部総務事務センター 黒澤 岳博<sup>1</sup>



## 1 はじめに

ボーイスカウトは、健やかな子どもを育成する世界的な運動である。イギリスの退役将軍ロバート・ベーデン・パウエル卿は、かねてから少年たちの教育に大きな関心を持ち、インドや南アフリカでの体験をもとに様々な野外教育を通じて、将来社会に役立つ人間に成長することを願い、1907年（明治40年）、20人の子どもたちと共に実験キャンプを行った。

このキャンプの体験をもとに、ロバート・ベーデン・パウエル卿は翌年「スカウティング・フォア・ボーイズ」という本を著し、少年たちの旺盛な冒険心や好奇心をキャンプ生活や自然観察、グループでのゲームなどの中で発揮させ、「遊び」を通して自立心や、協調性、リーダーシップを身につけさせようとした。これがボーイスカウト運動の始まりである。当初は青少年がこの本を読み、自分たちで活動を始めたが、それを支援する大人がボランティアとして参加し、現在のようになっている。

日本には、1908年（明治41年）にこのボーイスカウト運動が伝わり、国内各地で活動が行われていたが、全国的な統一組織結成への動きが起こり、1922年（大正11年）4月13日に「少年団日本連盟」が創立され、ボーイスカウト国際事務局に正式加盟となった。

このような経緯から、ボーイスカウトはその青少年教育活動を総称して、「ボーイスカウト『運動』」と定義している。いわゆる「組織」と異なり、青少年育成「運動」として、参加する青少年、成人ボランティアがその目的に従って固定的ではなく「有

機的に」活動をしていることをこの言葉で示している。このような形のNGO（非政府組織：Non Government Organization）でありながら、ボーイスカウトは行政とのつながりを重視し、協働の方法を様々な面から模索している。本来なら「運動」として自分たちの動きやすい形を模索し続けるため、世界規模・全国規模での活動を続けていくなら、都道府県・市町村などの地方自治体の範囲を飛び越えた方が活動を続けるための合理性を保つことが可能であるにもかかわらず、このような形で活動を続けている<sup>2</sup>。

本稿では、このような特性を踏まえ、まず埼玉県のボーイスカウトに関する基本的な状況を概説したのち、埼玉県におけるボーイスカウトに関する行政との協働の事例をいくつか提示する。また、昨年行われた世界160か国の代表3万人以上が参加して行われた世界的なキャンプイベントである第23回世界スカウトジャンボリーでの行政・企業等との連携や運営時の困難など様々な体験を紹介したい。

## 2 埼玉県のボーイスカウト

日本ボーイスカウト埼玉県連盟（以下、「埼玉県連盟」と略す。）の歴史は古い<sup>3</sup>。ボーイスカウトの前身となる戦前の少年団は県内12の市町村に存在していたが、当時の国家統制令により解散を余儀なくされた。1947年（昭和22年）、全国的なボーイスカウト再建の動きとともに、県社会教育課嘱託の河合寿三郎が中心となり、その年の10月には浦和第1隊、第2隊の発足式が旧埼玉会館前庭で行われた。その際には連合軍埼玉軍政部長・ライアン中佐、県知事・西村実造、県総務部長・大沢雄一、県

教育部長・細谷憲治、浦和市長・松井計郎が出席したとの記録がある。翌年には本庄、大宮、熊谷、川越に隊が設立され、県内各地に活動が広がっていき、1984年（昭和59年）に加盟員16,880人のピークを迎える。2016年（平成28年）7月末現在の登録は、県内に6,491人とピーク時の1／3近くになってしまっているが、それでも122個団503隊が県内で毎週のように活動を続けている。

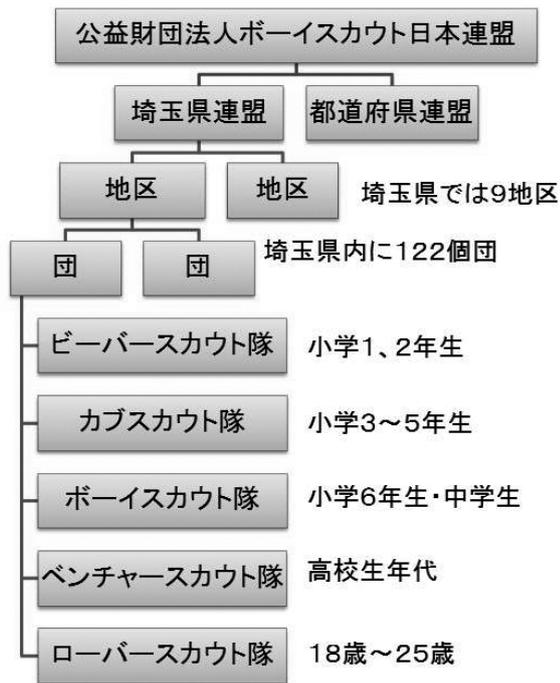


図1 ボーイスカウトの組織

ボーイスカウトは、自然の中で次のような活動を行うことが特徴となっている。

1. 青少年の自発活動であること
2. 青少年が、誠実、勇気、自信、および国際愛と人道主義を把握すること、健康を築くこと、人生に役立つ技能を体得すること、社会に奉仕できることの人格・健康・技能・奉仕を4本柱としていること。
3. 幼児期から青年期にわたる各年齢層に適応するよう、年齢に応じた部門があり、それぞれのプログラムが一貫していること。

「学校教育システム外で組織された教育活動（ノ

ンフォーマル教育）」であるボーイスカウトは、世界スカウト機構憲章に基づく「公益財団法人ボーイスカウト日本連盟教育規程」（以下、「規程」という。）により、その目的を「ボーイスカウトの組織を通じ、青少年がその自発活動により、自らの健康を築き、社会に奉仕できる能力と人生に役立つ技能を体得し、かつ、誠実、勇気、自信及び国際愛と人道主義を把握し、実践できるよう教育することをもって教育の目的」としている。また、成人指導者がボランティアとして主体的に参加することから、ボーイスカウトは「運動」としており、規程で基本方針を次のように定めている<sup>5</sup>。

#### 1-4 基本方針

ボーイスカウト運動（以下「本運動」という。）は、「ちかい」と「おきて」の実践を基盤とし、ベーデン・パウエルが提唱する班制教育と、各種の進歩制度と野外活動を、幼年期より青年期にわたる各年齢層に適応するようにビーバースカウト、カブスカウト、ボーイスカウト、ベンチャースカウト及びローバースカウトに区分し、成人指導者の協力によってそれぞれに即し、かつ、一貫したプログラムに基づいて教育することを基本方針とする。

埼玉県連盟に所属する各団では、これらの目的・基本方針を基に毎週のように活動を続けている。各年齢層に合わせた活動を行うため、高度な野外活動から地域での清掃奉仕活動まで多岐にわたる。

このようなボーイスカウト運動に、埼玉県では2016年（平成28年）7月末現在、小学生から25歳までの指導を受ける立場となる「スカウト」として3,911人、成人指導者及び団運営者が合わせて2,580人加盟している。



山あり谷あり、起伏に富んだ場所であった。このような場所でも青少年たちはとても楽しい5日間のキャンプを体験し、県内各地へ帰っていった。特に今回は赤城乳業株式会社から、数千本のアイスクャンディー「ガリガリ君」の提供があり、筆者を含め、とても暑い秩父の夏を冷たい「ガリガリ君」でしのいだスカウトも多く、青少年たちにとって、この支援は非常にありがたく、印象深いものとなった。以下で記述する第23回世界スカウトジャンボリーでも、赤城乳業株式会社はボーイスカウトに多大なる支援を行った。

## 5 第23回世界スカウトジャンボリーでの経験

こうした実績と盤石な活動体制を持つ日本のボーイスカウトは昨年、世界160の国と地域から、合わせて34,000人の参加者を迎えて、第23回世界スカウトジャンボリー（以下、「23WSJ」と略す。）を経験した。

オリンピックと同様、4年に一度、世界中のボーイスカウトの代表が集まって2週間程度のキャンプを行うこの世界スカウトジャンボリーでは、14歳から18歳までの参加者24,000人と、その参加者の生活の面倒を見たり、運営を行う成人ボランティアが8,000人参加する。2007年（平成19年）にイギリス、2011年（平成23年）にスウェーデンで行われたこの大会が昨年、瀬戸内海に「出島」のように飛び出た山口県山口市きらら浜で開催された。埼玉県からの参加者・参加隊指導者は311名。およそ4年をかけて行われた準備には、埼玉県からも70人を超える多くのスタッフが参加した。公用語が英語とフランス語、生活環境も全く違う各国のボーイスカウトたちが3万人以上集まって行われるこの大会で、埼玉県から派遣された8個隊は日中、会場内及び山口県内や広島市の平和記念公園で行われたプログラムに参加したほか、夕食後の自由時間には各国の派遣隊と積極的な交流を行った。

スタッフとして参加した70名は、6,000人の日

本からの参加者を取りまとめる日本派遣団の副団長、総務部長のほか、安全管理、参加者登録、場内の情報通信技術統括<sup>8</sup>、各国派遣団の支援、参加者の生活管理、場内食堂運営、場内輸送・交通管理、参加者プログラム運営などを行っている。参加者34,000人と、県内でいうと宮代町（33,922人）<sup>10</sup>と同様の大規模なこのキャンプでは、参加者が日本人だけではないこともあり、これまでの国内のボーイスカウトが経験することができなかった課題が数多く見受けられた。34,000人のキャンプを運営するスペシャリストはいないことから、これらの課題をボランティアが協力し合ってすべて解決しなければならない。大会期間の2週間と、その前後の準備・後片付けを含めて、スタッフは最大20日間会場で業務を続けていた。



図3 受付業務の様子 各国からのボランティアが仮設テントで34,000人を迎える。

スタッフは、業務を英語・フランス語で説明しなければならず、困難事例については、その判断の根拠を各国派遣団代表者に説明する必要もある。状況によっては、ボランティアだけで対応することが難しいこともあり、現地行政各機関、山口県、各省庁担当者、各国大使館との連携を確保することが求められた。特に、皇太子殿下を含めた各国要人・大使なども参加することから、警察との連携も随時行われた。

23WSJでは、県内各企業・団体との協力も多く経験した。埼玉県連盟ではこれまでの県内での協力実績から、各国参加者向けに会場内で設置するプログラムについて、理化学研究所とホンダ技研工業に協力を依頼した。理化学研究所は「分光学ワークショップ～光の秘密を探る～」をテーマに出展し<sup>11</sup>、全期間を通じて800人近くの参加者に「光」についてのワークショップを実施した。また、ホンダ技研工業は、ロボットに関する講義と、ホンダが開発したロボット「アシモ」の模型作りのプログラムを提供した。

さらに、埼玉県連盟では、23WSJに参加する直前にデンマークのボーイスカウト370名をホームステイプログラムとして迎えたが、そのうちの121名に関しては、県教育局と協力し、各げんきプラザでの交流プログラムを行った<sup>12</sup>。この交流プログラムでは、デンマークスカウト121名と共に、県内高校生および県内のボーイスカウト110名が加須・長瀬・神川の各げんきプラザに分かれて宿泊、それぞれの地域の伝統文化等を体験し、国際交流を深めた。

このような国際交流を、地域の住民、企業や団体等の協力を得て、独自で行える力をボーイスカウトは持っている。

これら「協働」の経験は、その後、当然県内の活動でも生かされており、理化学研究所の事業等での一般参加の子供向けに協力をしている。全国的にも、大会運営にご協力いただいたユニクロとの難民支援コラボ事業、イオングループとの防災キャンペーン

などを展開し、各都道府県のボーイスカウトが運営に協力している。

## 6 大きなイベントへの組織的な対応

これまでの行政との連携の歴史や、ボーイスカウトにおける青少年教育の趣旨、ボーイスカウトの世界的なイベント等に対する実績から、ボーイスカウトが大きなイベントの際に期待される役割は大きい。県内の例を挙げると、2004年（平成16年）に行われた埼玉国体では、開会式での大会旗の取り扱いを担当しており、代表の高校生たちが堂々と大会旗の入場を行った。

また、近年でも2014年（平成26年）にさいたまスーパーアリーナで行われた世界フィギュアスケート選手権大会で、入賞者の国旗掲揚を担当した。

1998年（平成10年）に行われた長野オリンピックでは、国内のローバースカウト（18歳から25歳）が各会場に常駐し、各競技の表彰式の国旗掲揚を担当した。

イギリスで生まれたボーイスカウト運動は、国際的な活動も多い。世界スカウトジャンボリーの他にも海外に派遣されるチャンスが多く、海外のボーイスカウトとの交流も積極的に行われている。国際交流の活動の中で、同じ活動を続ける他国の仲間を尊重する気持ちが育つとともに、日本の国のことも説明しなくてはならない機会が増えるので、自分たちの身の回りのことをより知っておく必要性を感じる。特に国旗の取り扱いなどについては、プログラムの一環としてとらえ、国際交流の場で重要となる国旗の掲揚方法、他国に失礼に当たらない旗の取り扱い方法の基本的な事項などを中学生で学ぶ。いわゆるセレモニーに関しても、青少年の活動の現場で、安全や規律の確保のために活用している。小学1年生からアクティビティが始まる前に参加者全員が集合し、みんなが気持ちを一つにするためにセレモニーを行う。

これらが通常のこととして行われているため、各

大会のセレモニーに合わせた修正を中学生、高校生なら十分やり遂げられるようなトレーニングが通常のこととして行われているのは、大きなメリットであるように感じられる。毎月・毎週の活動の開会式、閉会式でも手順が繰り返されているので、「いつものこと」になっており、このようなプログラムを標準化している青少年教育は他にはないことが、大きなイベントでの協力関係を築く機会になっていると考えている。

## 7 おわりに

熊本地震の際、登山家の野口健氏がアウトドア用品企業であるコールマン・ジャパンと協力して行ったテント村の設営には、現地でボランティアをしていたボーイスカウトも協力している。もちろん、埼玉県からも熊本地震へのボランティアとして参加しているボーイスカウトがいる。ボーイスカウトは成人指導者がボランティアで参加していることを見ても、社会貢献活動に対して積極的だ。

今後、日本でラグビーワールドカップ、オリンピック・パラリンピック、ワールドマスターズゲームズが2019年（平成31年）から3年連続で開催される。

これらの事業で、ボーイスカウトがお手伝いできることは、県内全体として見ても、各市町村で見ても多いのではないか。今回の23WSJを見ても、実は国内・海外の大イベントによく似た事業を、ボーイスカウトは独自で運営し、すでに経験している。リオ五輪でも参加者は11,000人、開催期間は17日間だと聞いているので、特に参加者として考えてみると、3万人が2週間参加するほど大規模なイベントは他には考えられない。海外からの入国手続きや広島へのバス輸送などを管理するだけでも、相当なノウハウを身につけていると考えていいだろう。ちなみに23WSJでは期間中、参加者とは別に15,000人が見学し、その多くが外国人であった。

特にボランティアに関する事業について、青少年とともに事業等を運営・支援できる団体はそう多くはないと思われる。残念なことに青少年の参加が少なくなってしまうているが、公民連携でいえば「公」の側も「民」の側も経験しているボーイスカウトが持つボランティアの「力」は、様々な形で行政の良きパートナーとして、今後も協働を模索することが可能であると思われる。

## 参考文献

- ◎黒澤岳博『ボーイスカウトの広報主体—日本連盟・県連盟・地区・団—』公共コミュニケーション研究第1巻第1号、2016年
- ◎公益財団法人ボーイスカウト日本連盟WEBサイト[http://www.scout.or.jp/whats\\_scouting/movement.html](http://www.scout.or.jp/whats_scouting/movement.html)
- ◎日本ボーイスカウト埼玉県連盟『50年のあゆみ』、1999年
- ◎日本ボーイスカウト埼玉県連盟『60年のあゆみ』、2009年

## 脚注

- 1 筆者はボーイスカウト埼玉県連盟で理事を務めるとともに、ボーイスカウト三郷第1団の団委員、ローバースカウト隊長、ベンチャースカウト隊副長等を委嘱されている。
- 2 例えば、佐賀県はふるさと納税でNPOを支援しており、これを機に佐賀県に本拠地を移したNGOも出始めている。
  - ・ふるさと納税（NPO等の支援）  
<http://www.pref.saga.lg.jp/kiji00331962/index.html>
  - ・佐賀を「NPO」の集積地にふるさと納税を武器に誘致  
<http://wedge.ismedia.jp/articles/-/5774>
 なお、この記事を書いた経済ジャーナリストの磯山友幸氏は現在公益財団法人ボーイスカウト日本連盟の理事で、社会連携・広報委員長を務めている。

- 3 参考文献として掲載した「50年のあゆみ」「60年のあゆみ」から詳細を確認できる。
- 4 以下の特徴については、ボーイスカウト日本連盟ホームページから引用した。  
[http://www.scout.or.jp/whats\\_scouting/scoutmovement\\_educationalssystem.html](http://www.scout.or.jp/whats_scouting/scoutmovement_educationalssystem.html)
- 5 ボーイスカウト日本連盟の諸規定については、次のURLで確認できる。  
[http://www.scout.or.jp/\\_userdata/org/h27\\_syokitei.pdf](http://www.scout.or.jp/_userdata/org/h27_syokitei.pdf)
- 6 条文としては次のとおり。  
3-3 育成会の設立「スカウト教育に当たっては、保護者をはじめ、教育、宗教、社会奉仕、体育、商工関係その他地域の関係者が育成団体となり、奉仕の精神をもって、スカウト教育活動を維持し発展させるため、育成会を設立する。②育成会は、所在する区市町村に団を設立し、団委員会を組織する。」  
3-4 育成会の任務「育成会の任務は、次のとおりとする。(1)本運動を支援し、団の育成と発展に寄与すること。(2)教育に必要な施設と経費の責任を負うこと。」
- 7 少年院などの矯正施設に設置されている例がある。  
椿 勇『矯正施設と地域社会-2-美保学園におけるボーイスカウト活動について』1992年、刑政 103(6) p.38～41
- 8 場内の情報通信技術に関しては、国立天文台・大江先生の協力を得て行われたが、250haの会場全域に無線LANを張り巡らす経験が国内になかったことから、次のような事例発表が行われている。  
・東京ドーム53個分の巨大屋外無線LANをどう作ったか?—第23回世界スカウトジャンボリーでの挑戦  
<http://itpro.nikkeibp.co.jp/atcl/column/15/120800279/>
- 9 場内の状況については、実際にボランティアとして参加した経済ジャーナリスト・磯山友幸氏のブログに概要が掲載されている。  
・2万6000人が「広島」を訪ねた「世界スカウトジャンボリー」  
<http://d.hatena.ne.jp/isoyant/20150824/1440373049>  
・世界スカウトジャンボリーを訪れた皇太子殿下と ボーイスカウトの知られざるご関係  
<http://d.hatena.ne.jp/isoyant/20150806/1438820073>
- 10 平成27年度国勢調査による。
- 11 このプログラムに関する理化学研究所の発表は以下のとおり。  
[http://www.riken.jp/pr/blog/2015/150820\\_1/](http://www.riken.jp/pr/blog/2015/150820_1/)
- 12 この事業については、げんきプラザ交流体験事業として次のURLで詳細を確認できる。  
<https://www.pref.saitama.lg.jp/f2216/station/genkiplaza-international-fellowship.html>
- 13 野口健氏は、1984年、イギリスの立教英国学院小学部在籍中にボーイスカウト活動に参加したことが、野外活動や社会貢献活動を行う原点となったと話している。  
[http://www.scout.or.jp/whats\\_scouting/message/noguchi.html](http://www.scout.or.jp/whats_scouting/message/noguchi.html)